

## トレイラー 1 海からきた客人たち

鞆は港町として近世いらい栄えました。船で人や物資を運ぶのは、今日にいたるまで最大の輸送手段です。瀬戸内海のほぼ真ん中に位置する鞆の港は、東西交通の要であり、明治になって鉄道が敷かれるまで、その機能を昔から維持しつづけました。

江戸時代、鞆の町は船乗りやさまざまな商人たちだけでなく、異国の賓客が立ち寄る観光スポットでした。潮を待つ間の数時間から数日間の滞在まで、多くの人たちが鞆に立ち寄っています。とりわけ幕末から明治への激動の時代に、その転換を担った人たちが鞆に立ち寄り、鞆の豪商たちがそれを支えました。残されている史料からだけでもそのドラマを伺い知ることができます。

朝鮮通信使、福禅寺で安らぐ(1771年)

シーボルト、鞆を観光する(1826年)

ペリー、保命酒を飲む(1854年)

尊王攘夷派の7人の公卿立ち寄る(1863-4年)

蒸気船「いろは丸」衝突する 坂本龍馬と紀州藩(1867年)

# トレイル-1 海から来た客人たち



■ 図中の数字は、本編中の※の数字に対応します。

## 1. 朝鮮通信使、福禅寺<sup>1)</sup>で安らぐ(1771年)

「福禅寺」<sup>8</sup>境内の本堂に隣接する客殿は、「対潮楼」<sup>8</sup>と呼ばれています。水道を挟んで仙酔島・弁天島に對面するこの客殿座敷からの景色は素晴らしく、ここを宿所とした朝鮮通信使<sup>2)</sup>との交流でも有名です。

自然景観を横長の窓で切り取るにより、薄暗い座敷の中に海の青と島の木々の緑に彩られた景色が、あたかも一幅の画を眺めているような効果を生んでいます。

また、東に面するため、明け方には茜色の朝焼けの中に島影が浮かび上がります。

季節のうつろいに伴い、日の出や月の出も南北に振れ景色に変化を与えます。同時に、日の出・月の出の位置と仙酔島との関係から季節の変化を読むこともできます。つまり天然の暦となっているのです。

福禅寺は、朝鮮通信使の三使(正使・副使・従事官)の迎賓館・宿舎として使用され、日本の漢学者や書家らとの交流の場ともなりました。

正徳元年(1711年)の7代將軍家宣の襲職祝賀のために来日した第8回通信使では、新井白石<sup>3)</sup>の主導により、幕府の予算の<sup>ひっばく</sup>逼迫から従来の饗応、待遇を全面的に変更する制度改革が行われます。この改革では、対馬から江戸の間での宴席の持たれる場が6か所に限られます。その際、赤間関(下関)、大坂(大阪)、京都、名古屋、駿府といった往時の大都市と並んで鞆が選ばれました。

この改革は日朝間の外交摩擦に発展しましたが、その時の通信使高官たちは、対馬から江戸までの景色のなかで、鞆の景観が最も美麗であると称賛し、従事官の李邦彦が「日東第一形勝」(朝鮮より東で一番美しい景勝地)の墨書を残しています。

また、延享五年(1748年)の9代將軍家重の襲職祝賀のために来日した、第10回通信使の正使洪啓喜は、この客殿を「対潮楼」と命名し、洪景海が「対潮楼」の書を残しています。

こうした対日交渉の軋轢のなかにいた通信使にとって、対潮楼からの美しく平和な景色は、真に心身が安らぐ場であったのでしょう。

- 1) 福禅寺は、平安時代の天曆年間(947~957年)の創建と伝えられる真言宗の寺院で、平安時代に村上天皇の命により空也上人によって建立されたと伝えられている。
- 2) 朝鮮通信使は、江戸時代、將軍の代替りごとに朝鮮国王から派遣された祝賀使節で、1607年から1811年までに12回(うち1回は対馬まで)日本に来ている。
- 3) 新井白石は、江戸時代中期の儒学者。7代將軍徳川家宣に仕えた。

【こぼれ話】 延享五年(1748年)4月、第10回朝鮮通信使が江戸幕府への参上の途中に鞆へ到着した際、彼らは激怒しました。日本の接待役が三使の宿所が対潮楼の客殿に宿泊する慣例を知らなかったため、楽しみにしていた福禅寺ではなく、寺町の阿弥陀寺が宿所とされたからです。一行は、福禅寺以外での宿泊を拒否します。船上で一泊した後、翌朝早く船を出してしまいました。

一方、復路では、福禅寺に泊まることができたので、通信使一行は大変上機嫌であったそうです。客殿に『対潮楼』の名が贈られたのはこの時です。



福禅寺・対潮楼の客間からの眺め

## 1. シーボルト、鞆を観光する（1826年）

江戸時代、瀬戸内海は物流の大動脈で、物資だけでなく、さまざまな人々も行き交っていました。その中央に位置する鞆は、潮待ち港として大変賑わっていました。朝鮮通信使、琉球使節のみならず、出島のオランダ商館長一行も立ち寄っています。

鎖国政策のもと、日本の海外への窓口は長崎の出島だけで、唐船とオランダ船のみが入港を認められていました。この出島にはオランダ商館があり、その責任者の商館長には、通商のお礼に江戸まで出向き、将軍に謁見して献上品を贈り、また、通商の許可・継続の条件順守を誓う義務がありました。これを「江戸参府」といいます。

シーボルト<sup>1)</sup>は文政9年(1826年)のオランダ商館長の江戸参府に同行し、その帰り路、鞆に上陸し、鞆の町を観光しています。<sup>2)</sup>

5月17日深夜零時頃、シーボルトの乗っていた「日吉丸」は仙酔島の東沖合に到着し、翌18日早朝に漕船に曳かれて鞆の浦に入港しました。用向きを聞きに出向いた月番宿老の土佐屋八三郎は、「上陸して休息をとりたいので、宿と風呂を用意してもらいたい」との要請を受けました。ところが本陣<sup>3)</sup>の上杉氏と中村氏は「蘭人は賤しき者」と理由をつけ、これを拒絶しました。

宿泊先が決まらないまま、昼頃、シーボルトたちは勝手に鞆に上陸し、結局「猫屋」<sup>13)</sup>と「土佐屋」<sup>14)</sup>とに宿泊することとなりました。残念ながら、この二つの建物は現存しません。

シーボルトは鞆の町を散策し、「大変きれいな町並み」「活気にあふれた町」「たくさんの小売店がある」あるいは「心から迎えてくれた」などと日記に記しています<sup>2)</sup>。「福禅寺・対潮楼」<sup>8)</sup>や「医王寺」<sup>27)</sup>などにも寄り、鞆の草花や昆虫なども観察しています。また、「宿屋籠藤」<sup>9)</sup>に行き、遊女二人を呼んだこともわかっています。

5月18日夜には、30隻の引き舟で港外に出、無事長崎に向けて出帆しました。

1) シーボルト(1796年ドイツ生まれ)は、文政6年(1823年)にオランダ商館付きの医師として来日した。長崎の鳴滝に塾を開き、蘭学の発展に大きく貢献している。しかし、シーボルト事件により、1829年に日本を追放された。

2) シーボルト著、斎藤信訳、「江戸参府紀行」、平凡社、1967年。

3) 宿駅で諸大名や幕府役人などが宿所とした公認の宿泊施設。

4) 5年の任期を終えたシーボルトの帰国に際し、国禁の日本地図や葵の紋服の携行が発覚し関係者が処罰された事件。シーボルトはスパイの嫌疑を受けて糾問1カ年の末

1829年国外追放、再渡航禁止を宣告された。

5) 現在、この版画はオランダのライデン国立民族学博物館に収蔵されている。

【こぼれ話】 シーボルトは、1829年のシーボルト事件<sup>4)</sup>で国外追放となりましたが、彼はあらゆるものに興味・関心を抱く、観察・研究熱心な壮年でした。「...医王寺にでかけた。...植物群はカシ・コナラ・マツ・クリ・エノキ・イヌヒバ・ツツジ・グミ・ハゼ・タケ・クズなどで、他の樹木とからみ合っている。ハゼの上でコフキコガネを見つけた。...」と、日記に記しています。また、彼がオランダに持ち帰ったものの中には『備後鞆土産小松寺庭松之図』という版画があります。たまたま立ち寄った一地方のお土産の版画まで収集しています。<sup>5)</sup>



浮世絵 「備後鞆の湊」 五雲亭貞秀作（個

人蔵）

資料出所：「鞆の町並みと商家の賑わい～シーボルトも称賛～」、P. 12

## 1. ペリー、保命酒を飲む（1854年）

「泰平の眠りをさますじょうきせん たった四杯で夜も眠れず」。大変有名な狂歌ですね。お茶の中でも上質の「上喜撰<sup>じょうきせん</sup>」と、蒸気によって進む「蒸気船」とをかけたもので、たった四杯（四隻）でしかないのに日本中大騒ぎとなり、特に幕府関係者は夜も眠れない状態である、ということ非常に上手に皮肉ったものです。

19世紀なかば近くになると、ロシア、イギリス、フランス、アメリカなどの艦隊が、開国・開港を求めてやって来るようになりました。その都度、何とか追い返してきましたが、嘉永6年（1853年）6月3日、4隻のペリー艦隊が浦賀沖に停泊しました。幕府は、フィルモア大統領の国書を浦賀で受け取ることを拒否、長崎に回航するように伝えましたが、ペリー提督は威嚇的な態度で受け取りを迫りました。やむを得ず幕府は、直ちに退去することを条件に国書を受け取り、ペリーは、国書の回答を受け取るために来年、再来港することを告げ、6月12日に江戸湾を離れました。

翌嘉永7年（1854年）1月13日、ペリーは再び江戸湾にやってきました。幕府は横浜村に応接所を設け、約1ヶ月の協議の末、3月3日に日米和親条約が調印されました。その後、交渉の場を下田の了仙寺に移し、下田条約が5月25日に締結されました。

これにより、1639年にポルトガル船の来港を禁止して以来215年ぶりに日本開国となり、日本はいよいよ幕末の動乱に突入していきました。

このペリーが保命酒<sup>4, 5, 19, 29</sup>を飲んだのです。このときの老中首座（現在で言えば内閣総理大臣）が備後福山藩主の阿部正弘だったのです。福山藩は代々、保命酒を御用酒としており、阿部正弘は幕府に献上していました。条約の締結には宴会が付きものですが、横浜応接所での接待の宴会でこの保命酒が供されました。おそらく、食前酒のシェリー酒のような感じで受け止められたのでしょうか、大変好評を博したようです。また、宴会はこれ一度ではなく、昼食会も含めしばしばあったようで、ここでも保命酒が供されたと思われます。

【こぼれ話】 いまや世界中で“日本料理”“和食”が人気を博しています。しかし、料理はペリーのお気に召さなかったようです。「...日本人の食物に関しては、たいへん結構とは言いかねる。見た目の美しさや豪華さにどんなに贅を凝らそうとも、日本の厨房はろくなものを生み出していないと言わざるを得ない...」<sup>1)</sup>と、酷評しています。

1) マシュー・C・ペリー著、木原悦子訳、『ペリー提督日本遠征記』、小学館、1996年。



韃の浦特産の「保命酒」

## 1・ 尊王攘夷派の7人の公卿立ち寄る（1863・4年）

ペリーの来航・開国、相次ぐ修好通商条約の調印、幕府の弱腰外交などにより、尊王攘夷論が急速に高まってきました。

尊皇攘夷を藩論とする長州藩は、朝廷内の尊王攘夷派の公卿（三條実美ら7人）と結び、朝廷での主導権を握りましたが、これに対し、文久3年（1863年）8月18日、薩摩藩と会津藩は、御所を警備していた長州藩士を襲撃し、この7人の公卿を謹慎処分しました。これが「8月18日の政変」です。

翌朝、7人の公卿は長州藩士に護られながら京を逃れ、夜来の雨の中、笠に蓑姿で長州に落ちてゆきました。これが「七卿落」といわれるものです。

七卿を含む長州勢約400人は、8月22日の夕刻20艘の船で長州に向け兵庫を出港、その途上8月23日に鞆へ入港・上陸し、保命酒屋の「中村家（現太田家）」<sup>20</sup>で、わずかの時間休息をとり、その夜再び強風をおして、慌ただしく出港していきます。

翌元治元年（1864年）7月、五卿（この間二人死去）は再び上洛の途中、7月18日から20日まで「中村家（現太田家）」に投宿しています。しかし、21日多度津に入港して蛤御門の変で長州が惨敗したことを聞き、再び長州に下ってゆきます。

この中村家に滞在中、三條実美は次の和歌を詠んでいます。

『世にならず鞆の湊の竹の葉を かくてなむるもめずらしの世や』

（“竹の葉”が酒のことで、保命酒を示しています。）

鞆という町は非常に面白い存在です。現在の福山市の中心部が形成されるはるか以前、古くは神功皇后の逸話の時代から、瀬戸内の中央部に位置する潮待ち港としてさまざまに重要な役割を果たしてきました。また、この七卿落が示すように反幕勢力を町屋が泊めています。しかも、福山藩は西国鎮守の譜代の大藩で、少し前には老中首座・阿部正弘を出しています。鞆の豪商の気骨、時代の先見性がうかがえます。

時の亡命者たちが立ち寄った「中村家（現太田家）住宅」ですが、1800年前後に建てられた瀬戸内を代表する保命酒醸造業者の建造物群で、いまは修復され国の重要文化財の指定を受けています。

【こぼれ話】 「中村家（現太田家）住宅」は海の本陣としても用いられ、店の土間の白黒の市松模様や天井の網代<sup>あじろ</sup>1)細工、茶室のにじり口（普通より高く、お客に頭を下げさせない配慮）、欄間の透かし、釘隠の金具あるいは隠し階段等々、細部までのこだわりが感じら

れます。また茶室だけでなく、主屋のさまざまなところが、豪商の粋と教養をさりげなく示しています。

1) 網代とは、竹、ヒノキ等を薄く細長くし、編んだ網状のもの。中村家では天井、障壁、戸などに使われている。



中村家（現太田家）住宅：搾り蔵二階の窓から見た風景（左側が主屋、右側が土蔵群）

## 1. 蒸気船「いろは丸」衝突する～坂本龍馬と紀州藩～（1867年）<sup>22</sup>

“いろは丸事件”が起こったのは、坂本龍馬が京都の近江屋で暗殺されるわずか半年前、翌年には明治になろうとする慶応3年（1867年）4月23日のことでした。

龍馬率いる土佐海援隊が、伊予大洲藩から借り受けた蒸気船「いろは丸」（45馬力、160トン）に商品や武器・弾薬<sup>1)</sup>を積み込んで、長崎から大阪に向かっていましたが、午後11時頃、讃岐国箱ノ岬沖で、長崎に向かっていた紀州藩の軍艦「明光丸」（150馬力、887トン）に二度にわたって衝突されました。

明光丸に乗り移ったいろは丸の海援隊士34名は、一つは修理のため、もう一つは“海難事故は現場近くで解決するもの”と主張して、いろは丸を鞆に向けて曳航させました。しかし、いろは丸は24日早朝宇治島の南で沈没してしまいました。

龍馬たちは廻船問屋「栴屋清右衛門宅」<sup>2)</sup>に、紀州藩は「円福寺」<sup>10)</sup>に投宿しました。早速、「魚屋萬蔵宅」<sup>15)</sup>や「福禅寺・対潮楼」<sup>8)</sup>で、我が国初の蒸気船衝突事故の万国公法を持ち出での賠償交渉が開始され、激論が交わされました。

ところが4月27日午後、明光丸は突然長崎に向けて出航してしまいました。「紀州はどういうつもりだ。あまりに無礼である。我々を鞆の港に放り上げたまま、急用があるからといって出航してしまっただけに<sup>2)</sup>と、龍馬は激昂しています。また、西郷吉之助や大阪の同志に「長崎で決着をつける。いずれ血を見ずにはおさまるまい。」と激怒した内容の手紙を送っています。

明光丸を追って長崎に入港した龍馬は、岩崎弥太郎や後藤象二郎を引っ張り出したり、イギリス東洋艦隊の司令官を絡めたり、さらには「船を沈めたその償いは金を取らずに国を取る」という唄を花街ではやらせたり、龍馬の幅広い人脈、優れた政治力、したたかな交渉力を遺憾なく発揮して万国公法による交渉を行っています。

結局、たまりかねた紀州藩は薩摩藩に調停を依頼し、五代才助の斡旋により約8万3千両（後に7万両に減額）の賠償金を払うことになりました。

この半年後の慶応3年11月15日、龍馬は、京都近江屋で中岡慎太郎とともに暗殺されました。明治という新時代を迎えるほんのわずか前でした。この時、龍馬33才。

1) 賠償交渉の中で、当時最新のミニエー銃を積んでいたと主張したが、現在までその部品すら発見されていない。これも賠償交渉術の一つであったのだろうか？ なお、引き上げられた部品や沈没状況は「いろは丸展示館」<sup>22)</sup>に展示されている。

2) 慶応3年5月中旬に寺田屋伊助に宛てた手紙より。

【こぼれ話】 常に暗殺の危機にあった龍馬ですが、いろは丸事件の賠償交渉時も決死の覚悟をしていました。“才谷梅太郎”という偽名を用いたり、二階の隠し部屋に投宿したりもしています。妻お龍への手紙は、“鞆殿”と変名で宛てられています。さらには、親しい者に遺品ともいえる品物を贈ったり、万が一の時のお龍の処遇まで依頼しています。



旧魚屋萬蔵宅：坂本龍馬と紀州藩の談判所跡